

令和5（2023）年度WCRP平和大学講座

「諸宗教における人間性の教育を語る—他者の痛みへの共感を育むために」

（令和6年3月14日（木）14：00～17：00 於 浄土宗宗務庁）

神道と人間性の教育—神道の言葉を通じて—

國學院大學 藤本頼生

はじめに—筆者の立場と人間性の教育を語る上での難しさ

- ・今回は、我が国の古典や中世の神道思想などで記された言葉を中心として、神道（神社神道）が大切にしてきた考え方について触れ、教育上で大事にすべきことを述べることで、神道における人間性の教育について考えてみたい。なお、日本神話についても触れたいところであるが、時間に限りもあり、今回は割愛する。

1. 人間性の教育の素地となる神道の言葉と考え方を考える

※以下、それぞれの言の解釈については主に岡田米夫『神道百言』神道文化会、昭和45年による

【慎みの心—謙虚】

* 慎みて怠ること莫れ（斎部広成『古語拾遺』大同2年〔807〕年）

※日本武尊に倭姫命が草薙剣を授けて教えたと言われる言葉

…伊勢神宮に詣でて、倭姫命に辞見（まかりまを）したまふときに、草薙剣を以て日本武命に授けて教へて曰く、「慎みてな怠りそ」といふ。（『古語拾遺』景行天皇条）

→人生は常に身を慎み、なまけることなく、精進に精進を重ねよという意。物事を為す基はこれしかないという意

* 祭祀のことは徳と敬とにあり、心敬を致さずんば、神いづくんぞ享けん（『日本後紀』延暦18（799）年6月15日条、桓武天皇詔） …大和国・広瀬、龍田祭に当って国司の怠慢を戒めた詔。

→神に真心を捧げるのが、祭り。その真心は敬いと慎みの心を持つことから生まれる。これを忘れては、神に祈っても神は喜んでお受けにはならない。

☞神は非礼を受けず

* ただ慎の一字こそ眼（まなこ）なれ、神に仕ふるには慎にかざる事也

（度会〔出口〕延佳『陽復記』慶安3〔1650〕年）

* 神は人の敬によって威を増し、人は神の徳によって運を添ふ

（『御成敗式目』第一条、貞永元〔1232〕年）

→我が国における伝統的な人と神との関係性を説いた言葉

* 日本人としての主体性を保持した寛容性と謙虚さ

（國學院大學校史学術資産センター編『教養総合「神道と文化」サブテキスト 國學院大學の130年』平成24年、1p）

→神道精神を建学の精神とする國學院大學において神道精神を表現した一文）

主体性を保持しながら、寛容であること、謙虚であること…相反する部分があり、難しい

[正直] [清浄]

* 凡そ神は正直を以て先きとなし、正直は清浄を以て本となす

(度会家行『神道簡要』文保元 [1310] 年)

* 正直の頭に神宿る (『倭姫命世記』)

日月は四州を廻(めぐ)り、六合(くに)を照すと雖も、須(すべか)らく正直の頂きを照らすべし…

→正直の道は清い心、清い行いを絶えず持続し実行することで実現。

* 凡夫も神明の域に至るの捷徑、正直の二字にある也 (出口延佳『神宮続秘伝問答』)

→神道に入る心得とは何か。それを考える上で、一般の人にて神の御心に到達する最も近い道は「正直」の二字を守り、それを実行する以外にないということを直接的に述べたもの

* 神は正直にして明らかなり、故に神明といふ

(宮城春意『神道大意演義』 宮城…愛媛小松藩に勤仕。林羅山の門人、儒家神道)

☞中世・近世に興隆した神道思想である伊勢神道では特に正直と清浄の二徳を重視。

正直と清浄…清(浄)く明るく、直く正しく生きること

そのためには外面だけでなく内面での清浄が必要

ケガレを祓う…祓と禊

いつまでも暗い思いを引きずるのではなく、早く気持ちを切り替えて、前を向いて(下を見ず上を向いて)行きなさいということ

正直の徳目…「鏡」に例えるとわかりやすい

「鏡」=その日が調子よくても悪くても人の姿を正直に映し出すもの。また、磨かないと曇り、その姿を明らかにすることができない。だからこそ磨いて綺麗にしておくことが大事

※正直・清浄を重んじた生活を送ること…「祓」の倫理化(谷省吾『物を見る目』平成6年)

[日用] と [感謝]

* 神道は日用の間にあり(出口延佳『陽復記』慶安三 [1650] 年) の一節

…玉串を持、神語唱る事等は、祭庭などの儀式、是も亦神道の一事にして尤も重しとする所なり。されど此事計(ばかり)を神道と思ふは、天を管の穴より覗きたるに等し。管の穴より見たるも、天にてなきはあらねど、そのみには余りにせばき事也。それを神道と云は、人々日用の間にありて、一事として神道にあらずと云事なし

* 日本国に生れたる人は、心に得て、身に行はでは叶はざる道、…(中略)…日用の間、神道ならざといふ事なし(出口延佳『太神宮神道或問』、寛文6 [1665] 年の一節)

→神の道は特殊な道ではなく、毎日の行為が、神の御心に叶っているかどうかを反省し、日々慎みの心を持って精進していくこと。神道とは人々の日常生活の中で行うもの。神社のなかで行われる祭事だけが神道ではない。生きるものすべてに神が宿り、生きることすべてが神々と共にある。日々の暮らしそのものが神道である。平素から自省をしながら日々を送ることが大切、大事なこと。

[感謝]

* なにとなくただありがたき心こそ、伊勢の内外の神の道なれ (『度会延佳詠草』)

→「神道は日用の間にあり」と説いた出口延佳が伊勢神宮の神道とは何かと聞かれた際に、「ただ有難いことです」「有難いという感謝の心を持つことです」と教えたと言われる

* なにごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる (西行法師歌集)

→伊勢神宮に詣でた西行は、美しい神宮の杜を見た際に、すべての万物に宿られる神様の姿は見えないが、自然の姿に尊い神々の姿を感じて、もったいなくて涙がこぼれたという意

[自省]

* 何事も本つ心の直きにかへりみ (省) よ (賀茂真淵「国意考」)

* 古を稽へて今を照らす (稽古照今) (『古事記』上巻、序文)

→昔のことを参考にして、今日のあり方を考える。経験を通じて反省の資とする。

* 詔り直し、聞き直し、見直す (『古事記』上巻／『延喜式』大殿祭祀詞)

→人は完全ではない。他人の言葉、他人の行為を善意をもって見直し、善い方に解釈して受け取る、そうすることが相手を包容し、善い方に導くことに繋がるという考え方

※「詔り直し」…『古事記』上巻の須佐之男命の勝ちさびの段にある「天照大神は咎めずして詔(告)り直したまへども…」との語から

「聞き直し、見直し」…『延喜式』大殿祭祀詞にある言葉

→自省…リスク社会を脱するためには大事な観念

[扶助と救済・奉仕]

* 神道は本を立て、世を助け、人を救ふ、この三つより外にあることはなし

(大国隆正『天津祝詞太祝詞考』)

→神の道の根本は、万物を産み給うた祖神の心を重んずることにある。更に人の世は助け合い、人のために奉仕してゆく以外にはないという意。大国隆正…幕末から明治維新にかけて活躍した神道家。平田篤胤の門人。

* 「神道とは、万人と仕合わせを分かちあうことに喜びを求める生き方」のことである (櫻井勝之進

「恩頼に報いる道」『K-らいふ 全学一体』127、平成14年3月)

…常々、「人々のつながりのなかに神はいらっしゃるのだ」と申していた (櫻井勝之進大人命偲び草編集委員会編『惜陰』平成18年、140p)

※櫻井勝之進 (故人) …元神宮禰宜、多賀大社宮司、神社本庁総長を歴任。博士 (学術)。神宮崇敬者総代や神社本庁顧問・長老。芦屋大学教授、皇學館大学理事長も務めた神職であり神道研究者。

仕合わせ…地域の人々が互いにそのつながりをもとに、それぞれの役目 (仕事) を合わせて果たせば、祭りが完遂。→仕合わせによって、おのおの幸せを得ることにつながる
お互いに助け合い、それぞれができる事をなしていくことが祭りの上では大事。

「福祉」の語→「welfare」=人々が幸せを享受／「福」と「祉」=ともに幸せという意

☞神社、神道は地域を初め、人々の幸せを祈ることで共同体を支援

＊敬神生活の綱領（神社本庁、昭和 31 年）

神道は天地悠久の大道であつて、崇高なる精神を培ひ、太平を開くの基である。

神慮を畏み祖訓をつぎ、いよいよ道の精華を發揮し、人類の福祉を増進するは、使命を達成する所以である。ここにこの綱領をかかげ向ふところを明らかにし、実践につとめて以て大道を宣揚することを期する。

- 一、神の恵みと祖先の恩とに感謝し、明き清きまことを以て祭祀にいそしむこと
- 一、世のため人のために奉仕し、神のみこともちとして世をつくり固め成すこと
- 一、大御心をいただきてむつび和やぎ、国の隆昌と世界の共存共栄とを祈ること

◎敬神生活の綱領…昭和 31 年に神社本庁評議員会にて制定した、神々を敬うための日常生活上の指針。前文と三か条からなる

☞むつび和らぎ→和睦の精神が大事であることも示す

和睦…人々がなごやかな気持ちで、親しみ合うこと。なかむつまじくすること。あるいは仲直りをする。争っていた人や国が、争いをやめ、親しくすること。

[慈悲]

＊春日大明神（慈悲） 千日注連を曳くと雖も、邪見の家には到らず
重服深厚たりと雖も、慈悲の室には赴くべし

→慈悲の心を持った清らかな人の家に神は訪れ、その神恩、恵をくれるもの。神は千日にわたって注連縄を張って、強い忌みを行っているような家であっても、心が邪見なようであっても、その人のところには神は来ない。神は誤った考えや身勝手に迷惑な者のところには来ないという意。

☞中世の神道思想の一つである吉田神道では三社託宣（三社…天照皇大神宮、八幡大菩薩、春日大明神）を示し、江戸期には三社託宣の掛軸が庶民の神道教化の教科書的な役割を果たしたが、そのなかで大事にすべき三種の徳目の一つとして「慈悲」を示している。

おわりに

- ・人間性の教育を行う上で、神道の徳目をもとに考えてみたが…
- ・慎み（謙虚）・正直・清浄・自省・感謝・扶助・救済・慈悲・和睦という、私たちの日々の生活（日用の間）の中で至極当たり前に大切とされる事柄を重視。
- ・他者の痛み、共感に対して→今回は触れられなかったが、日本神話にある神々の事績のなかからも見ていく必要性（天照大御神と須佐之男命、大国主命など）
- ・平和な世界を作り出すためにも、奉仕と扶助と祈り、睦み和する（お互いに多様性を認め合い仲良くすること）ことが大切（敬神生活の綱領）
- ・神社神道の宗教的特徴からの難しさ
- ・人間性の教育という面では、家庭での子弟教育は基本的にない。（なお、宗教者としての資格取得のための学識を中心とした養成教育はある）
- ・神道の担い手である神職は、出家して世俗との関係性を形式上だけでも絶つということがあるわけではない。あくまで日常、俗世の中で暮らしながらのもの。
- ・日本の神々（広く自然の様々な事象を八百万の神々として考えて崇めてきた）とともに共生してゆくための宗教思想、日本人の生活文化のなかで培われてきた神道を家庭教育で説くのは、簡単なようで、日常生活にあるものに気づかせることでもあり、むしろ難しいかも知れない。

以 上